学位申請論文【要旨】

日本天台における因明の研究 ―受容から終焉まで―

仏教学専攻　吉田慈順

【構成】

序論
　第一章　問題の所在
　第二章　研究の方法
本論
　第一章　日本天台開創以前の因明研究
　　第一節　『因明正理門論本』・『因明入正理論』の訳出とその背景
　　第一項　陳那『因明正理門論本』の成立に関する説話
　　第二項　『瑜伽師地論』の因明
　　第三項　玄奘訳に見られる因明について
　　第二節　基の因明理解と同時代における異説
　　第一項　「源唯仏説」について
　　第二項　「刧初足目、創標真似」に対する智周の会通
　　第三節　『成唯識論掌中枢要』の二比量
　　第一項　「二乗之果」比量
　　第二項　「所説無性」比量
　　第四節　内明と因明の関連を巡る議論
　　第一項　元暁『判比量論』に見る五姓各別
　　第二項　法宝と法蔵の因明理解
　第二章　日本天台開創期の因明研究
　　第一節　最澄の因明批判
　　第二節　『通六九証破比量文』における二比量説
　　第一項　「二乗之果」比量への反論
　　第二項　「所説無性」比量への反論
　　第三項　法性宗対法相宗の認識
　第三章　同時代的視座から見る日本天台継承期の因明研究
　　第一節　『大乗三論大義鈔』に見る同時代性
　　第二節　『大乗三論大義鈔』における二比量批判
　　第一項　「所説無性」比量に対する批判
　　第二項　「二乗之果」比量への批判
　　第三節　『一乗仏性慧日抄』の二比量説批判とその背景
　　第四節　『成唯識論掌中枢要』二比量批判の思想的根拠
　　第五節　『大乗三論大義鈔』における因明理解
　第四章　日本天台継承期の因明研究とその終焉
　　第一節　最澄門下における因明への対応
　　第二節　『愍諭弁惑章』に見る当時の論争
　　第一項　『愍諭弁惑章』の撰述者について
　　第二項　『愍諭弁惑章』における因明について
　　第三節　日本天台における因明研究の終焉
　　第一項　広学竪義と因明研究
　　第二項　「因明論義」論争
結論

【はじめに】

日本天台宗の特徴は、「論・湿・寒・貧」という、一般に「四名物」と称される言葉で表される。「論」は論義、「湿・寒」は比叡山の多湿・寒冷な環境、「貧」は清貧を重んずる気風をそれぞれ表すが、本論文で問題とするのは、この中の「論義」についてである。

日本仏教の論義は、大きく二種に分類することができよう。第一は、文字による論義、第二は、法会における論義である。この中、文字による論義とは、文献を著す中に、他説を破し、自説の正当性を宣揚するといった方法で行われるもので、この場合、必ずしも対論者同士が直接会う必要はなく、相互に文献を著すことで問答が成立する。日本天台の歴史においては、最澄と徳一の論争がこれに該当する。

一方で、法会における論義は上記とは違い、定められた日時・定められた場所で、立論者・対論者が、直接自義の正しさを巡って論争を行う。これは、一つの宗派内で行われることもあれば、複数の宗派間で行われることもあり、ちょうど、南京の三会や北京の三会に代表される、所謂「論義」のことを指す。

論義は、第一の場合にせよ、第二の場合にせよ、他説の誤りを指摘し、自説の正当性を主張することが求められるため、論争における一種のテクニックやルールが必要となる。そして、仏教において、このテクニック、ルールに該当するものが「因明」なのである。

東アジア仏教における因明の研究は、玄奘によって、陳那の『因明正理門論本』・商羯羅主の『因明入正理論』が翻訳されたことをきっかけに、本格的な研究が始められることになる。その際、因明の研究を主導したのは当然ながら玄奘の門人たちであり、自然、因明の研究の中心的な地位は、法相宗の学僧によって占められることとなるのである。これは日本においても同様で、道昭や玄肪によって中国の法相唯識学が伝えられると、これとほぼ同時期に因明の研究も始修されるようになる。すなわち、奈良時代後期・平安時代初期には、孝仁（？～七六七～？）や平備（生没年未詳）、秋篠寺の善珠（七二三～七九七）といった人師によって既に因明に関する書物が撰述されており、因明に対する関心の高さが確認される。

ところが、四名物の第一に論義を掲げる日本天台においては、開祖である最澄が、因明に対して否定的とも取れる言葉を残しており、また、円仁や円珍といった日本天台を代表する人師の教学体系の中にも、因明の要素を見出すことができない。加えて、江戸期に編纂された日本天台における中心的な論義集である『天台問要自在房』（『百題自在房』）や『台宗二百題』といった論義書の中にも、因明に関する論義題は見当たらない。つまり、日本天台においては、自宗義の研鑽としての論義と因明とが結びつくことなく行われてきたのである。

さて、このような日本天台における因明研究の在り方については既に先学によって種々の指摘がなされているが、いまは、その代表的なものとして、武邑尚邦博士の以下の見解を紹介しておきたい。

> 前節までに述べたように、わが国における因明研究は、その伝来のままに法相宗の伝統の中で展開した。それは、法相教学の伝統が慈恩大師基によって形成され、また、彼に『因明入正理論』の『大疏』があるからであろう。しかも、因明の研究は菩薩の所応学として無著や世親によって位置付けられていたからでもあろう。しかし、法相宗内においても、いわゆる法相唯識の教学としての内明と、因明という論議学とが必ずしもうまく機能していたとはいえない。このことは前節で指摘したところであるが、まして、当時、いわゆる一乗家の人々にとっては厄介な問題であった。法相の立場は、

因明がいわゆる世俗の論であるとしても、『瑜伽師地論』では、学ばれねばならない学問として、研究課題の中に位置付けられているが、一乗家では厄介なことであっただろう。たとえば、伝教大師最澄が、「四記答は智の所須に約す。三支の量、何ぞ法性を顕わさんや」といって、因明は仏教の至極を説く一乗の立場を明らかにする学問ではないと明言しているように、教学の中での明瞭な位置付けがないこと、また、「外典を習うは刀をもて泥を切るが如く、泥は減ずることなく、しかも刀は自ら損するなり」という『名義集』の『大智度論』引用にも、このことが明らかに示され、ここでは内明因明の関係は否定的である。

以上のように仏教の外論である因明を所応学として認めない一乗家の人々が、自らの教を護るために因明を研究することについて、抵抗を感じたのは想像できることである。といって、当時の南都の仏教に対しては、因明を学び、その理論上の争いに勝つことが要請されていたのである。[*1]

武邑博士の見解は、日本天台諸師の因明研究について、実に要を得たものであるが、その一方、このような分析によって一定の解決を得てしまうことで、それ以上の検討が成されてこなかったという点に、大きな問題があるように思われる。例えば、武邑博士は、日本天台における因明研究について、「教学の中での明瞭な位置付けがない」、「当時の南都の仏教に対しては、因明を学び、その理論上の争いに勝つことが要請されていた」と指摘されているわけであるが、では、日本天台諸師のこのような因明に対する姿勢は何に基づくものであったのか、言い換えれば、「教学の中での位置付けがない」、という位置付けは何に基づくもので、また、「南都の仏教」との「理論上の争いに勝つことが要請されていた」当時の状況とは、具体的にどういったものであったのか。これらの点について考究しないことには、日本天台における因明研究の実態が解明されたことにはならないと思われるのである。

そこで本研究では、日本天台の因明研究について、その受容から終焉に至るまでを概観し、日本天台諸師に通底する因明に対する認識と、その認識が何に基づくものであったのかの解明を目的として、以下の四章から検討することとしたい。

【第一章　日本天台開創以前の因明研究】

先ず第一章では、日本天台の因明研究を考究する準備段階として、中国における因明研究について検討する。前に、日本天台における因明研究の特徴として、「自宗義の研鑽としての論義と因明とが結びつくことなく行われてきた」ということを指摘したが、これは、因明に対する認識の相違に基づくものと考えられる。因明の研究を積極的に行ってきた法相宗とそうではない天台宗とでは、そもそも因明に対する捉え方が異なっているのである。では、法相宗において因明が積極的に学ばれた理由は一体何であったのか、この疑問点を出発として、法相・天台間の相違点を明確にしようとするのが本章のねらいである。

そこで、本章では、はじめに中国における因明研究の出発点となった陳那『因明正理門論本』について、本書がどういう経緯で翻訳されることとなったのか、また本書、及び陳那に対して、法相宗ではどのような認識を有しているのかを検討し、陳那『因明正理門論本』と法相宗の所依の論典『瑜伽師地論』との関連が、法相宗における因明研究の基盤となっていることを指摘した。

---

*1 武邑尚邦『因明学―起源と変遷―／新装版』（法蔵館、2011、p.152）。

次いで、この認識は、玄奘の門人・基にも通底するものであり、基の因明研究の背景には、因明を、『瑜伽師地論』の教理を伝え説く上で必須の学問と捉える思想があったことに触れ、その上で、後世の日本天台を始めとする、所謂一乗家諸師において大きな問題とされた基『成唯識論掌中枢要』に主張される「二比量」について検討し、五姓格別を因明の三支作法によって論証しようとする基の思想について考究した。

また、このような五姓格別を巡る三支作法を用いた議論として、元暁の『判比量論』の記述を概観し、玄奘以降、仏教の教理を因明によって明らかにしようとする態度が顕著となっていく様相の一例を確認した。なお、仏教の教理を因明によって明かそうとする人々がいる一方で、当時、因明では仏の真実説を明らかにすることはできない、という見解を有する人もおり、その代表として法宝・法蔵を取り上げ、両師の因明理解について検討した。

【第二章　日本天台開創期の因明研究】

本章では、日本天台開創期の因明研究として、最澄の因明に対する認識について検討を行った。前にも紹介したとおり、従来、最澄は因明に対して否定的な見解を有していたことで知られるが、この最澄の因明に対する認識が何に基づくものであったのかが明らかでなかった。そこで本章では、最澄と徳一の論争における因明に対する見解の背景を探り、これが法宝をはじめとする中国における一乗家諸師の見解を背景とするものであったことを突き止めた。また、その上で、最澄による基の『通六九証破比量文』の「二比量」に対する批判を確認し、最澄が「二比量」を巡る論争を「法性宗対法相宗」という観点から行っていたことを指摘することで、因明に対して否定的な最澄の立場は、天台宗という立場に由来するものではなく、広く一乗家諸師に共通するものであった可能性について示唆した。

【第三章　同時代的視座から見る日本天台継承期の因明研究】

第三章では、第四章における検討の前提として、最澄滅後の日本仏教における因明研究について、三論宗玄叡の『大乗三論大義鈔』を中心に考究した。『大乗三論大義鈔』は、他宗の説を批判する際に、因明の三支作法による立破を多用しており、このことから、当時、法相宗外の人師においても因明が盛んに研究されていたことが知られる。また、本書は当時の実際の論義に取材して撰述されたものであると見られており、当時の論義においても、因明が極めて重要なものとして扱われていたことがわかる。ここに、最澄滅後の日本仏教における因明研究の具体相を見ることができるのであり、同時代の天台宗諸師が置かれていた状況、すなわち日本天台継承期における因明研究の背景を窺うことが可能となったのである。また、『大乗三論大義鈔』に、因明の論法が多分に取り入れられていることは、本書に『因明大義鈔』なる別称があったとされるほどである。ところが、『大乗三論大義鈔』が真に教学的な拠り所としているのは、第一章で見た中国の法宝なのであり、この点、法宝が因明に対して否定的であったことと、やや矛盾するように思われる。そこで、さらに『大乗三論大義鈔』における因明比量批判、すなわち基の『成唯識論掌中枢要』に対する反駁を確認することで、玄叡にもまた、法宝や最澄と同様に、因明によっては真実を明かすことはできない、という共通意識のあったことを論証した。このことは、第二章において述べた、最澄の「法性宗対法相宗」という認識が当時の一乗家諸師において通底した認識であったことを裏付ける根拠となるものといえよう。

【第四章　日本天台継承期の因明研究とその終焉】

第四章では、日本天台継承期、すなわち最澄滅後の天台宗諸師が、前の『大乗三論大義鈔』に見られたような因明研究の盛り上がりの中、どのように因明に対応していたのかについて検討した。前にも述べたとおり、円仁や円珍といったこの当時の諸師は、その教学体系の中に因明の要素を見出すことが出来ないのであるが、これは彼らが因明に対して無知、あるいは無関心であったということではない。この両師は、共に入唐して因明に関する典籍を将来しており、また、弟子に対して因明に関わる教授を行っていたこともあきらかとなった。つまり、当時の日本天台は、因明に対して否定的であった最澄の思想を受け継ぎつつ、因明を研究する必要に迫られていたのである。これは、前の『大乗三論大義鈔』に見られるように三論宗の玄叡が、因明の論法によって他宗批判を行っていた当時の状況に由来するものであると考えられる。また、円仁の弟子、安慧の『愍諭弁惑章』には、当時の国分塔会において、因明による問難を受け、その場で答えることが出来なかったということが記されており、この当時、実際の講会において因明による議論が行われていたことが知られるのである。このことから、因明に対して否定的な見解を有しながら、因明の研究を行うという、ある種アンバランスな日本天台の態度は、このような状況によって生じたものであったことが知られるのである。

以上のような流れは、やがて天台宗においても因明が盛んに研究される状況を生み出すこととなり、源信の『因明論疏四相違略注釈』といった典籍はいずれもこのような状況の中で作成されたものである。しかしながら、日本天台の因明研究は、延久四（一〇七二）年の円宗寺の法華会で起こった「因明論義」論争によって、一つの終焉を迎えることとなる。この論争は、天台宗寺門派の頼増と、興福寺の頼信によってなされたものであるが、講師であった頼増が、頼信の因明に関する問いに対して、「因明は天台宗の義ではないため、答えない」といって回答を拒んだことに端を発するものである。この論争が特異であったのは、後にこの頼増の主張が認められ、論義において因明の義を持ち出すことが停止される自体に発展し、これによって、「北京に因明研究者のみるべきものをなくしてしまった」と評される状況へと向かうことになるのである[*1]。従来、この論争については、主として歴史学の立場から、背景に政治的思惑のあったことが指摘されているが[*2]、中国、日本における因明研究を通史的に考えれば、この頼増の主張こそが、日本天台の人師として極めて当然の主張なのであり、この論争は、いわば日本天台の因明研究における帰結点であったと考えられるのである。

---

*1 武邑尚邦『因明学―起源と変遷―／新装版』（法蔵館、2011、p. 164）。

*2 平雅行『日本中世の社会と仏教』（塙書房、1992）、菅真城「北京三会の成立」（『史学研究』206、1994）。